Bulletin of Aichi Univ. of Education, 69（Humanities and Social Sciences）, pp. 79 − 87, March, 2020

「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」
－ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語り－（Ⅱ）

ラインハルト・ヘッセ* 編著
舩尾 日出志**　城田 純平***　今泉 尚子**** 訳

* フライブルク教育大学元教授
** 名誉教授
*** 人間環境大学助教
**** 早稲田大学大学院生

“Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste”: Die Geschichte von Hilde und Rose Berger. (II)

Reinhard Hesse*,
Hideshi FUNAO**, Junpei SHIROTA*** and Naoko IMAIZUMI****

*Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland
**Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
***Assistant Professor of University of Human Environments, Okazaki 444-3505, Japan
****Graduate student of Waseda University, Tokyo 169-8050, Japan

序

舩尾は友人の哲学者ラインハルト・ヘッセ先生より，2014 年 9 月に 1 冊の本（“*Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger*“ Haland & Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013）をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく，艱難辛苦のナチス時代をかろうじて生き抜いた 2 人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。そしてその本の大部分は 2 人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

導入
　ベルトホルト・バイツによる序言
　ヘッセ先生による序文
Ⅰ　ヒルデ・ベルガーの物語り
　テキスト 1「ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914 − 1945）を語る」
　テキスト 2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」
　テキスト 3「ハロルド・ツィリンおよびマリー・ツィリンのヒルデ・ベルガーとの対話」
Ⅱ　ロゼ・ベルガーの物語り
　テキスト 4「マリー・ツィリンのロゼ・ベルガーとの対話」
　テキスト 5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」
ヘッセ先生による結語にかわる書簡

前報では，導入部分とテキスト 1 の途中までを和訳した。すなわちテキスト 1 は原著の 21 頁～ 57 頁を占めているが，そのうち 26 頁から 42 頁までをこの第 2 報で和訳する。そこでは 1932 年から 1941 年までのおおよそ 10 年間におけるユダヤ人ヒルデ・ベルガーの過酷な生活が浮き彫りにされる。

訳者の 3 名はすべてヘッセ先生と懇意にする者である。もちろんヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳，および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。なお原文のイタリック体で強調された部分は翻訳文でもイタリックで表記した。（　）は原文にある補足説明であり，《　》は原文にある脚注であり，【　】内は訳者による注釈である

キーワード：ナチス体制（Nazi-Regime），水晶の夜（Kristallnacht），ポグロム（Pogrom）

Ⅰ　ヒルデ・ベルガーの物語り

1. テキスト1：ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914-1945）について語る

ニューヨーク　1980年11月24日

（承前）

その年【1932年】の秋，ベルリンの交通関係の労働者が，賃上げを求めてストライキをした。その闘争の「奇妙」という言葉では言い尽くせない特質は，共産党もナチスも参加したことであった。そして褐色のシャツを着たナチスと赤旗をもつ共産党員が街路で協力するのがみられた。そこではストライキをする労働者を支援するための募金活動がなされていた。政治的な理由から社会民主党はそのストライキに関与することを躊躇した。わたくしにとって，それは跳躍ポイントであった。わたくしの考えでは，共産党は，本来的に直接是認される動機によるものであっても，ナチスと共同で何かをすべきではない。ましてやナチスに抗して闘うことがはるかにより重要であった時期だったのだから。

わたくしがその政策にたいする自分自身の厳格な反対を，声を大きくして表明したとき，ベルリンからやってきた青年共産主義者同盟指導者により組織された会合に出席するよう求められた。その会合でわたくしは，党の路線に留まるか，あるいは除名されるか二者択一を迫られた。その決断はそれほど困難でなく，わたくしにとって，おおよそ1年前の“Brith Haolim”（ユダヤ語，「立ち上がる者たちの同盟」の意）との決裂ほどは難しくも，辛くもなかった。さらに，わたくしは孤独でもなかった。わたくしの弟および，わたくしが引き続き個人的接触を維持していた“Brith Haolim”派の若干の仲間たちも同一の結論に達していたからである。自認し，かつ社会的に知られたトロツキー主義者として，わたくしたちは共産党から反革命および「左翼的豚」であると罵られた。

その間にベルリンとドイツ全体における政治状況はますます悪化し，SA【突撃隊】と共産党の間の街頭闘争がいっそう増加した。ついに恐れられていた瞬間がやってきた。1933年1月30日にヒトラーはヒンデンブルクによって宰相に指名された。ナチスは一揆なしに権力に就いた。労働者組織だけでなく，すべての議会制度上の諸機関，ワイマル共和国のすべての遺産，たとえ不十分であったとしても，簡単に言えば，ドイツの民主主義を破壊するために一致団結した運動に抗して，西部地域の最強の労働者組織の側から実践的にいかなる抵抗もおこらなかったのは，きわめて驚くべき，かつ不可解なことであった。

ナチスによる権力奪取に抗する抵抗の欠如へのその深い失望は，2つの大きな労働者政党であった社会民主党と共産党の誤った政策に関するわたくしのトロツキー主義的見解を強化した。

ヒトラー体制の最初の数か月が重要であった。もっとも風当たりの強かった共産党や社会民主党の指導者たちは国を離れるか，あるいは拘束された。（ドイツにおける最初の強制収容所はユダヤ人のためにではなく，政治的敵対者のために設置された。）ベルリンの街路ではナチスのテロが支配し，多くの有名な反ナチス的な人々が住居から連れ出され，そして殴打され，それどころかしばしば殺害された。ある日，左翼的傾向の新聞に執筆し，そして近所に住んでいたあるユダヤ人ジャーナリストの母親に，突撃隊の隊員がかの女の息子の血まみれの着衣を届けた。次の言葉を添えて：「これはお前の息子が政治に口を出した結果だよ。残ったのはこれがすべてなのさ。」

ナチス体制の初期だと，わたくしたちの友人たちはまだわたくしたちの家を訪問し，政治状況について話し合うことができた。話し合いはかなり理論的で，可能な行動に関するものではなかった。わたくしたちの住居はひじょうに小さかったので，わたくしの父親は，わたくしたちが何について話しているのか分かっていた。ある日かれは言った。「子どもたちよ，ヒトラーやスターリンのような巨人（父は「英雄」という意味のヘブライ語である“Giborim”という用語を使用した）に戦いを挑もうとするなんて！いったい何を達成できると思っているのか」。もちろん父は，ラディカルな人たちが拘禁されるか，あるいは身を隠したと聞いたとき，不安になっていたのだ。そしてわたくしたちは父に，非合法活動に参加しないと約束しなければならなかった。

すでにヒトラー体制の最初の数か月において，弟とわたくしは尋常でない状況におかれた。地区の共産党員はわたくしたちがトロツキー主義者であると知っていた。その非合法ビラで共産党はトロツキー主義者やその他の「反革命分子」の氏名を公表し，そしてかれらを革命運動の危険な敵であると侮辱した。必然的にそのような資料はゲシュタポの手に渡った。したがって弟とわたくしは，両親の家を離れることにした。少なくともナチスによるテロの最初の危機的な数ケ月においては。その後，直接的な危険が去ったと考えたとき，帰宅した。

わたくしたちの地区の多くの共産党員はその間に姿を消した。共産党員は拘禁されたか，隠れたか，あるいはドイツを離れた。短期間にナチスはその体制を固め，そして公然の抵抗を恐れる必要はなくなった。ナチス以外のすべての政党は禁止された。左翼的傾向の，あるいは自由主義的な新聞はもはや許可されなかった。社会民主党系の労働者組織はナチスによって継承された。伝統的な労働者の日としての5月1日は「民族労働の日」になった。ユダヤ人あるいはリベラル系

の著者たちの本は公然と焼却され，そして図書館，本屋及び学校から排除された。

わたくしたちの非合法活動は人目を忍ぶ会合であった。そこでは，わたくしたちはトロツキーの著書や理念を論議し，わたくしたちの思想を磨き，そして他のさまざまな急進派とのディベートに備えた。わたくしたちは他の急進派をわたくしたちの側に取り込もうとした。わたくしは，他の左派系諸グループの友人たちとの会議用に使用されるトロツキー主義の資料をタイプで作成し，そして増し刷りした。その会合において，わたくしたちは尾行されないようにおおいに用心した。地下鉄やバスからは常に最後に下車した。1934年春にわたくしたちのグループの2人が拘禁された。その2人の同志はわたくしの名前と住所を知っていた。しかし―わたくしたちが「前衛の中の前衛」のメンバーであるかれらにも期待したように―かれらはわたくしの名前や住所を漏らさなかった。1934年の後半，わたくしの弟がビラをもっていたという理由で拘禁された。そのビラを弟は，かれがゲシュタポにたいして主張したように，街路で何者かに無理に押しつけられたのだ。かれは18歳に満たず，そしてしかもかなり幼く見えた。ゲシュタポは弟の言葉を信じ，そしてかれは6か月間の少年刑務所という驚くほど軽い判決で逃れてきた。かれは少年刑務所で決して不幸ではなかった。というのは，弟は少年の特権を享受したから。かれは本を読め，そして1日に2時間スポーツができた。

その当時，わたくしは実家を出た。というのは元々のシナゴーググループ以来の友人の一人であるアルフレト・バカレニク（Alfred Bakalenik）と結婚したからであった。かれもシオニストから青年共産主義者へ，そしてそれからトロツキー主義者へという同じ思想発展を遂げた。（わたくしたちトロツキー主義者たちのなかに次のようなジョークが存在した。すなわち，わたくしたちは実に短期間に非政治的なシナゴーグ礼拝者【Synagogengänger】から最初はシオニストに，さらに社会主義的シオニストに，さらに共産党員に，そして最後にはトロツキー主義者になった。わたくしたちはそれを，わたくしたちの「複合的発展法則」とよんだ。その表現はトロツキーが，まさに工業化のもっとも遅れた国の一つであったロシアでのプロレタリア革命の勝利を説明するために用いていたのだ。）わたくしの信念にしたがって，わたくしはブルジョア的な慣習に従いたくもなく，そして法律的に結婚したくもなかった。激しい，嵐のような我が家での議論のあとようやく，わたくしは両親をなだめるためにユダヤのフッパー【ユダヤ教徒の結婚式で用いる覆いで，「天蓋」とも訳される】を用いることを自分に納得させた。－そのことを，わたくしは同志や友人には秘密にした。

弟が少年刑務所から釈放されて6か月も経たないうちに，かれはまたもや逮捕された。－　それは後に運命的であることが明らかになった。1935年秋にベルリンからハンブルクまで非合法の資料を運ぶべき使者が雇用された。弟が名乗り出た。自分がもっとも若く，そしてわたくしたちすべてのなかでもっとも嫌疑をかけられていないという理由で。ハンブルクのトロツキー主義者グループはゲシュタポによって監視され，そして弟がある同志の家に現れたとき，かれはグループの残りの人たちと一緒に拘禁された。かれはベルリンに連れ戻され，尋問されそしてゲシュタポによって拷問された。酷い身体的虐待にもかかわらず，かれは同志の名前を漏らさなかった。独房での1年半にわたる苦悩のあと，かれは重懲役9年の判決を受けた。

1936年初頭，わたくしたちのトロツキー主義者グループのメンバーであって，わたくしの現在の【ここでの「現在」とは1980年11月である】夫であるアレックス・オルゼン【Alex Olsen】が危機に陥った。かれの同志の一人が，すでに拘禁されていたのだが，ゲシュタポによっておとりにされたのだった。しかしその同志は幸運にもアレックスに警告することができた。その結果，アレックスは短期間ベルリンの地下で過ごし，その後イギリスに行った。そこでかれは，わたくしたちのグループの危機的状態に関する情報を持った女性に出会った。かれはわたくしに，わたくしたち皆が危険な状況にあり，自分と同じくドイツを離れるべきだと手紙を書いてきた。不幸にもわたくしはかれの警告に耳を傾けなかった。わたくしは留まり，そして地下活動の継続が義務であると感じていた。

1936年11月5日午前5時，わたくしがアルフレトと住んでいた家具付き部屋のドアがノックされた。2人のゲシュタポが「陰謀と反逆」という理由での逮捕状を持っていた。わたくしたちはベルリンの警察庁に連行された。1週間後，わたくしたちは囚人輸送でそこからマグデブルクに連れていかれた。マグデブルクで裁判が行われることになっていた。ベルリンのわたくしたちを訪問したマグデブルクの同志も拘禁されていて，そして激しく責められて，わたくしたちの何人かの名前と住所を漏らしてしまっていたのだった。わたくしはマグデブルクで独房に入れられた。ゲシュタポによる尋問はいつも真夜中におこなわれた。当初わたくしは何らかの非合法組織とのあらゆる関係を否認した。それから，わたくしはマグデブルクの同志に対面させられた。かれはわたくしに，わたくしのヒミツの名前である「ジェニー」で語りかけた。しかしわたくしが最大のショックを受けたのは，鍵穴を通して弟のハンスをみたときであった。弟は，かれがベルリンのゲシュタポ本部で受けた殴打や拷問のために怯えているようにみえた。ゲシュタポはわたくしに弟と話させなかった。ゲシュタポはわたくしを取調室に戻し，そしてわたくしに言った。「あなたの弟がどういう状況

か見たね。どれほど長期にわたって我々がかれを確保しているかご存知でしょう。わたくしたちには時間があります。わたくしたちは待つことができます。もしあなたが話さないなら，まったく同じようなことになります。そしてあなたには両親と2人の妹があります。その人たちも逮捕しましょうか。」そこで，わたくしは戦術を変更した。以前は拒絶していた食事と煙草を受け入れた。そしてゲシュタポに，わたくしのグループはシオニストの団体であり（偶然，逮捕されていた全員がユダヤ人であった），わたくしたちは政府に敵対しておらず，そしてわたくしたちはパレスチナに移住すること以外の何も欲していないと話した。アルフレトとわたくしは，逮捕されたらそのように論じると決めていた。わたくしは引き続き何度か尋問された。きまって夜に。そしてわたくしからいろいろな名前を引き出そうとした。わたくしは国を去っている若干の人々の名前を挙げた。わたくしは決して殴打されなかった。唯一の圧迫は，わたくしの残りの家族を逮捕するという脅迫であった。

わたくしは，拘置所長が女性のプロのコソ泥をわたくしと同室にさせた3週間を除いて，14か月ゲシュタポの独房にいた。わたくしはそのプロのコソ泥やかの女の仲間たちの生活のなかの興味深い出来事を聞きはしたが，しかしかの女の絶え間ないおしゃべりは，それはわたくしの読書や思索の邪魔をしたのだが，神経にさわり，そしてわたくしは再び一人にしてくれるように依頼した。わたくしは再び一人だけになったことを喜び，そして拘置所の図書室から本を取り出して読むことに勤しんだ。大部分はドイツの古典や小説であった。その種の本のために，わたくしは従来ほとんど時間をさけなかったからである。毎日半時間，わたくしは拘置所の中庭で散歩できた。そこでは少なくとも太陽をみた。拘置所での初日から，わたくしは毎朝および毎夕スポーツをした。それによって良き身体コンディションを維持するために，そして自己規律という理由から。月に1度わたくしは手紙を書くことが許された。もちろん検閲はされた。わたくしはある月に両親に書くと，翌月は夫に，そしてその翌月は弟にと手紙を書くようにした。審理前のずっと，わたくしは夫と会うことを許されなかった。かれも同じ拘置所にいたのに。

わたくしたちの裁判は1938年1月にマグデブルクで始まった。わたくしたちは6人がベルリン出身で，そして1人がマグデブルク出身であった。わたくしには裁判所よって決められた弁護士があてがわれた。わたくしはその弁護士を拒否した。というのはその弁護士はわたくしにとってまったく助けにならないことを，わたくしは知っていたからである。判事はかれの判決のなかで，わたくしたちトロツキー主義者が，共産党にたいして闘っていたとはいえ，同党と同じく国家にとって危険であることを明らかにすることに価値をおいた。しかし何らかの裏切り活動のいかなる証明もなく，そしてさらにわたくしたちは現行犯逮捕されたのでなかったので，判決は比較的甘いものであった。もう一人の女性ハナー（かの女は後にわたくしのもっとも親しい友人になった）とわたくしは2年半の懲役刑，アルフレトは3年の懲役刑，他のすべては4年の懲役刑になった。弟が数か月前に受けた懲役9年という刑を考えれば，わたくしは事実，そのような甘い判決をうけたことが嬉しかった。取り調べ中の時間も加算されたので，わたくしはさらに16か月しか刑期を務める必要はなかった。したがって，わたくしは幸運であるという気持ちであった。

判決の直後，わたくしとハナーは囚人輸送で女性刑務所に運ばれた。その刑務所はシュレジア地方のヤウアーに存在し，そしてわたくしたちは聞いていたように，ドイツ全体でもっとも厳格な女性刑務所として知られていた。刑務所長と監視たちは全員ナチスで，そして政治犯を本当の刑事犯罪人よりも憎んでいた。荒縄からざるや網を作る労働の間，わたくしたちはしゃべることを許されない。わたくしたちは大きな寝室ホールで寝た。そのホールは小さな独房居に分割され，その独房居に囚人が一人ずつ閉じ込められた。そこはとても寒かったので，小さな桶のなかの洗い水は凍った。寝る前に暖まるために，わたくしは毎日の体操を簡易ベッドの上でおこなった。というのは立つスペースはほとんどなかったからである。わたくしはすべての衣類をたった1枚の薄い毛布の上においた。にもかかわらず夜間，寒さで震えながら何度も目が覚めた。たいていの囚人は政治犯，何よりも共産党員であった。共産党員は刑務所における生活を支配し，そして自分たちの意見と違う者たちを反革命だと侮辱した。それゆえハナーとわたくしはトロツキー主義的活動について沈黙することを決めた。というのは，わたくしたちは他の囚人たちとのいかなる接触も失いたくなかったからである。

1か月間の共同部屋の後，わたくしは自分の独房居に移された。というのは，わたくしはまだ25歳以下だったから。わたくしは針仕事をしなければならず，刑務所図書室から数冊の本を取り出し，そして朝夕にしっかりと運動を行った。しかしわたくしは他の女性たちと会えなくて寂しかった。ある日，わたくしは刑務所の診療室でハナーと出会った。かの女は，別の刑務所への移送が計画されており，そこでは農業労働が行われることになっていると語った。政治犯，とりわけ共産党員の戦略は当然，決して自由意志で何かを志願するものではなかった。しかしハナーとわたくしは，わたくしたちはそのような変化で良くなるだけであるという意見を持っていた。そしてわたくしたちが正しかったことが明らかになった。というのは，農場での

労働はわたくしたちにとって非常に良かったから。

わたくしたちは1938年春にカッセルの近くのツイーゲンハインに行った。刑務所ではあったが，あまり厳格ではなかった。監視たちの大部分はすでにナチス時代以前からここで勤めていた。農場での最初の数週間は極端にハードだった。わたくしたちは甜菜【サトウダイコン】の果ての無いような列の間でひざを折って仕事をしなければならなかった。その後，牧草刈りや干し草撹拌の時期になった。今日でも，さわやかな干し草のかおりは，わたくしのなかにあの時代の快適な記憶を呼び起こす。ときどき，善良な監視がそこにいたときには，わたくしたちは歌うことが許された。さらに，わたくしたちは量が多くて，そして美味しい食事をとった。したがってわたくしは，進んで志願したことを後悔しなかった。収穫期には，労働はかなり過酷になった。わたくしたちは重いわら束を集め，まとめ，そして荷車に載せなければならなかった。しかしその間に，わたくしは身体労働に慣れ，そして長所は苦難をはるかに上回ることが分かった。

1938年11月にハナーとわたくしは農場労働から撤収させられた。わたくしたち2人だけがユダヤ人だった。そして他の人たちから孤立させられたのだ。その理由はパリにおけるあるユダヤ人によるドイツ人官僚の殺害であった。それは卑劣な「水晶の夜」を引き起こした。何千人というドイツに住むユダヤ人が拉致され，そして強制収容所送りとなった。その時期，わたくしの両親と姉もまた好ましくない外国人としてポーランドに輸送された。

不可解な理由で，ハナーとわたくしは数か月後，ベルリンからおよそ2時間の距離に位置するコットブスの刑務所に運ばれた。そこでわたくしたちは再び他の囚人たちと一緒になった。そのほとんどは政治犯ではない犯罪者であった。わたくしたちは荒縄で網を作った。そのとき，わたくしにはまだおおよそ3か月の刑期が残されていた。したがって保釈までの日数を計算することができた。

その刑務所での時期，わたくしは週に1度手紙を書くことを許された。わたくしはある週は夫に，翌週は弟に，そしてその翌週は両親に書いた。わたくしはある立場を考え出した。それを他の人々は「ヒルデの状況哲学」とよび，そしてそれに則ってわたくしは，可能な限り自分自身のことを考えずに，わたくしよりももっと調子の悪い他の人々，例えばより長期の禁固刑をうけたり，ゲシュタポによって拷問されたり，そしていつも身体的に傷つけられて苦しんでいる他の人々の世話をするように努めた。

保釈のおよそ1か月前，わたくしは刑務所長に呼びだされ，そしてノルウェーに親戚がいるかどうかを尋ねられた。わたくしは，外国にいる同志たちがわたくしを助けようとしていると受けとめたので，肯定の返事をした。すると，オスロの親戚から電話があり，そしてわたくしの保釈の日時を知りたがっていたという情報が伝えられた。1939年5月6日に，ついに自由になる日が来た。わたくしの若干の私物は返却された。すなわち時計，衣服（さっそく長きにわたって着ることを強いられていたみすぼらしい囚人服から着替えた），そしてわたくしが刑務所で稼いだ若干の金銭。わたくしたちが受けとった判断によれば，わたくしとハナーは14時に釈放されるということだったのだが，ちょうど正午初ベルリン行きの列車があった。そしてわたくしたちはいつも態度が良かったので，2時間早く出立することを許可された。

ついに自由になったということがほとんど信じられなかった。わたくしは常に，他の政治犯の場合に，とりわけユダヤ人の政治犯において見られたように，監獄から直接，強制収容所に送られるのではないかという不安を持っていた。最初に，ハナーとわたくしは食糧品店に行き，そして新鮮なパン，ハム，若干の果物とお菓子を買った。－　それらはすべて，長きにわたって食べられなかったすべてであった。

ベルリンに到着して，わたくしはまだベルリンにいた叔母の自宅に行った。ハナーは，その間にかの女のスウェーデンに向けての出国を準備していた母親のところに行った。

叔母宅での夕食において玄関のベルが鳴った。玄関には一人の見知らぬ男性がいた。かれはノルウェー労働党のキェル・オッテセンであると自己紹介した。かれは外国にいるわたくしの同志たちと接触していた。同志たちも，わたくしが強制収容所に送られることを恐れているという話であった。キェルはわたくしをコットブスの刑務所に迎えに行こうとしたのだが，しかしわたくしはすでに去っていた。2人きりになったとたん，キェルはわたくしにノルウェーのパスポートを手渡した。そのパスポートは虚構の氏名を記載した新品ではあったが，しかしわたくしの妹の顔写真が貼りつけられていた。わたくしの妹は1938年にパリに行っており，そしてわたくしと同じくトロツキー主義者であった。友人たちは，わたくしの写真を入手しようとしたが，1枚も存在しなかった。それゆえ友人たちは妹の写真を使用した。妹は確かに少しわたくしに似ていたが，しかしすごく似ていたわけではなかった。キェルは，わたくしが飛びあがって喜ぶこともせず，そしてかれと一緒にノルウェーに行こうとしないことにおおいに失望した。そのパスポートにはもうひとつ欠陥があった。ノルウェーからドイツへの入国のスタンプが欠けていた。それにたいして十分には時間はなかった。わたくしは安全で，自由だと感じており，そしてそのような欠陥のあるパスポートのせいで再び拘禁されるリスクをおかしたくなかった。それゆえキェルに，わたくしにかわって，わたくしの名前で合法的

なビザを取得するようにお願いした。かれは約束してくれ，そしてノルウェーに帰っていった。

自由になってからの最初の日曜日に，わたくしはブランデンブルク刑務所の弟を訪問した。かれが何歳も老けていたのを見たとき，わたくしの心臓は張り裂けそうだった。かれは痩せ，したがっておおいに体重を失っていた。しかしそのほかの点では，かれはゲシュタポの拘置所での殴打からは回復していた。かれは穏やかで，そして上機嫌であった。かれの釈放まではなお5年かかると，わたくしたちはいずれにせよ考えた。しかし弟と二度と会うことはなかった。

次の日曜日に，わたくしは夫であるアルフレトを訪問した。かれはベルリンからはいくらか遠い刑務所にいた。かれは直ちにわたくしを説得して，できるだけ早くドイツから出国させようとした。というのは，かれは，わたくしは釈放されたとはいえ安全でないことを恐れていたからである。わたくしたちは将来の計画を作成した。わたくしたちは，半年でノルウェーないしイングランドで会えることを願った。残念ながら，かれとも二度と会うことはなかった。

今や，有効な旅券を入手することがわたくしの主な課題であった。わたくしはベルリンのノルウェー大使館から1通の手紙を受け取っていた。そこには，もしわたくしが有効なパスポートを持っているのなら，ビザを取得できるとあった。さらに，わたくしはイングランドへの入国証明を得ていた。わたくしは人から羨ましがられる状況にあったのだ。他の人たちはそれらの文書の1つを手にするために，数千というお金を支払わねばならなかった。わたくしの問題はしかし，わたくしが，ベルリンで生まれたにもかかわらず，ポーランド国籍であることであった。1937／1938年にポーランドは，ポーランドで生活したことのないユダヤ人から国籍を奪った。わたくしは自由であることを喜んでいたし，そして自分自身に何か危機が迫っているとは信じなかった。わたくしは自分の時間を満喫していた。とはいえ，わたくしはドイツから出国することを欲した。そして“イェッケ”《“Jecke”は，東方ユダヤ人がかれらの目に典型的とうつるドイツ系ユダヤ人をよんだ好意的なあだ名であった。そのあだ名はドイツ系ユダヤ人を外的にその恵まれた境遇，モダーンさ，および異質さにおいて際立たせ（ジャケットを着て，カフタンは着なかった），そして性格的にドイツ系ユダヤ人に想定された素朴さの良き部分と結びついた真面目さを特徴づけた》のための最良の道は合法的な道であると考えた。それゆえ，わたくしは警察本部に行き，わたくしの事情を説明し，そして旅券を申請した。わたくしが外国人としてドイツでの滞在許可を有しているのかどうかを問われたとき，滞在許可はわたくしが刑務所にいる間に終わっていると答えた。わたくしはもはやポーランド国籍を有していないので，無国籍者用のパスポートを申請した。警察の担当職員は，わたくしがそもそも刑務所から出てきたところだということにすごく驚き，そして1週間後に再度来るように要求した。しかしその2日後，わたくしはまたも逮捕された。わたくしが自由を楽しめたのは2週間ないし3週間という短い期間でしかなかった。

その後の「警察拘置所」における6週間，わたくしは弁護士を介して無国籍者用のパスポートを手に入れようとした。わたくしのいとこの数回の訪問のうちのどこかの回に，同席した看守が，わたくしの両親が今ポーランドにいるという事実を知った。明らかにかれはナチス時代より以前の職員の一人であった。かれはわたくしを助けようとした。自由往来可能な「緑の国境」【grüne Grenze】を越えてポーランドの家族とのところに行くようにと助言してくれた。後に，それが実際にうまくいったのには驚いた。

1939年7月，わたくしは警察の監視のもとで，同じくパスポートを持っていなかったあるユダヤ人女性と一緒にポーランドとの国境に運ばれた。わたくしたちはポーランド警察に捕まらないように警告された。ポーランド警察はわたくしたちを願わしくない外国人として送り返すだろうし，そしてそうなるとドイツ警察はわたくしたちをもはや放免しないだろうと言われた。わたくしたちはある種の中立地帯におかれたのだ。かなり遠くに制服を着た数人の男たちが見えた。その夜は広い畑のなかで過ごした。そして夜明けまで待った。早朝6時頃，わたくしたちは思い切って国境を越えた。かなり遠くまで広範囲にわたって人影はなかった。それで，わたくしたちは2キロか3キロ歩いた。そして一人のポーランド人農民に出会った。幸運にもわたくしの同伴者はポーランド語ができた。かの女は，わたくしたちがポーランドのグディニア港からバスで1時間足らずのところにいることを聞きだした。かの女はその農民からバス代のお金を得ることにも成功した。農民は2人の寂しげな女性がドイツ人から逃れて，2人だけでその地域を歩かされていることを明らかに心配していた。

グディニアでは，わたくしたちはユダヤ教の教区センターに出向き，そして支援を願った。わたくしは自分の事情を説明したところ，1週間以内にパスポートを入手できると言われた。わたくしの両親と姉たちが住んでいたボリスラフでも，結果は同じであると知ったので，わたくしはそこに行くことにした。2年半，母や姉たちに会っていなかった。しかしその決断は，わたくしが刑務所からの釈放後におかした2番目の大きな過ちであった。もっともわたくしは当然，戦争が目前に迫っていることを知らなかったのだ。

両親は，わたくしが身体的にも精神的にも良い状態であることをみて，とても喜んでくれた。刑務所での農場労働のおかげであった。わたくしが両親に，ポー

ランドに留まらず，ノルウェーかイングランドに行くことに決めたと話したとき，両親はがっかりしたが，その決断を受け入れてくれた。わたくしはポーランド語ができなかったので，いとこに，わたくしと一緒に県庁所在地都市に行き，ポーランドでのわたくしの立場を公認してもらい，そしてパスポートを申請してくれるように依頼した。2週間ないし3週間待った後，わたくしは小さな町の役人たちとではうまくいかないということを意識するようになった。それゆえわたくしは弁護士を採用した。その弁護士は，賄賂で試してみるように提案した。

しかし残念ながら，ドイツ人はわたくしよりもはやかった。9月1日に，かれらはポーランドに侵攻してきた。それで戦争であった。わたくしはポーランドで立ち往生してしまったのだ。

わたくしがボリスラフにやってきたとき，そこにはおよそ4万5千人が住んでいた。その割合はポーランド人とウクライナ人とユダヤ人が3分の1ずつであった。ボリスラフはかなり小さい町だったが，その豊かな天然ガスと石油の生産ゆえに，大きな意義をもつ町であった。何よりも外国のさまざまな商社がそこで活動していた。ほとんどすべての住民はその産業部門で働いていた。そのなかに多くのユダヤ人もいた。そのようなことは異例であった。初めてわたくしは，プロレタリアートであるユダヤ人と知り合った。

母の家族を介して，わたくしは主にユダヤ人で構成された地域の共産党グループとコンタクトをとった。共産党は非合法であったけれども，定期的な会合があったので，わたくしは参加した。いとこたちはわたくしを同志「ベルリンカ」であると紹介し，そしてわたくしが2年半ナチスの刑務所に入っていたと話した。わたくしは1939年8月にはロシアによる占領を夢にも思わなかったけれども，わたくしは本能的に，自分がトロツキー主義者であるを黙っていた。皆はナチスのドイツで起こっていることを，好奇心を持って聴き，そして何よりも，どうしてヒトラーが最強の労働運動の国で権力に到達しえたのかと質問した。わたくしの説明のなかで，わたくしはもちろん社会民主党を批判したが，しかし共産党をも批判した。それゆえ「逸脱者」であると誹謗された。

共産党員との大きな口論になったのは，独ソ不可侵条約のときであった。わたくし一人だけがヒトラーの戦争遂行へのロシアによる支援を批判した。他の人たちはスターリンとモロトフの平和政策を擁護した。ドイツ軍がその条約締結後間もなくポーランドに侵攻してきたとき，わたくしが正しかったことが明らかとなった。にもかかわらず共産党員たちは引き続きスターリンの政策を擁護した。その共産党員たちの目には，スターリンの政策はロシア人の祖国の，それゆえ国際労働運動の利害にかなっていると思えたのだ。

9月初めにドイツ軍部隊がボリスラフを占領した。しかし奇妙なことに，その後の短いドイツ軍占領期間，あまり戦闘行為はなかった。ユダヤ人が街路での労働を強いられたことを除けば，極端な反ユダヤ的行為もなかった。とはいえ若干のユダヤ人は髭をそられ，殴打されたが，殺害されることはなかった。早くもその2週間後，ポーランドがカーゾン線【Curzon Lineは，第一次世界大戦後，イギリスの外務大臣ジョージ・カーゾン卿によって提唱されたポーランドとソ連の間の境界線のことである。第二次世界大戦後のポーランドの東部国境は，ほぼこの線の位置にある】に沿ってロシアとドイツに分割された後，ドイツ軍は平和的に撤退し，そしてわたくしは今やロシアに占領されたポーランドの部分に存在することとなった。

ロシア軍がボリスラフに侵攻してきたとき，地域の共産党員は歓迎デモを組織し，そして赤軍を花と革命歌で迎えた。そのことはわたくしのなかにノスタルジックな感情と不安を喚起した。ユダヤ人だけがロシア人を歓迎した。ポーランド人とウクライナ人はむしろ反ロシアで，そして反共の立場をとった。ボリスラフの埋蔵石油はすぐに国有化された。バクーからやってきた技術者と国選委員が管理を引き受けた。

わたくしの敵，ラトナーは共産党の指導者で，そして若干年の間ポーランドの刑務所に入っていたのだが，ロシア軍の市司令官のアシスタントになった。かれは司令官にすべての市民の政治的過去に関する詳細な情報を提供した。一家族が食券を得るためには，少なくとも1人は働かねばならなかった。ラトナーは仕事を割り当てる係りをしていた。わたくしにも仕事を割り当てた。かれはわたくしに汚れた残飯を与え，そしてわたくしのために機械工補助の仕事を探しだした。しかしわたくしはそれを受け入れざるをえなかった。その仕事場に行くのに，ほぼ5キロの距離の丘を登らねばならなかった。3週間おきに，わたくしは夜間に働かねばならなかった。最初，ポーランド人やウクライナ人の同僚は，わたくしがロシアの情報提供者であるという疑念をもっていた。しかし2，3か月後にはわたくしを信頼し，そして受け入れてくれた。ロシア軍占領下での生活は過酷でそして荒涼たるものだった。厳格な労働規律が導入された。労働者が3度遅刻すると，解雇された。さまざまな企業集会で労働者たちはより良い仕事着と人間的な労働条件を要求した。しかし労働者たちによって発言者として白羽の矢を立てられた者は逮捕され，そしてかれの顔はもはや2度と見られることがなかった。すぐに誰ももはやあえて，資本主義諸国では労働組合の普通の要求に属し，そして合法的なストライキの理由とみなされる基本的な事項についてすら語ろうとしなくなった。

バクーからやってきた技師たちは家族を伴っていた。ロシア人たちはポーランドの労働者の「高度な」

生活水準について驚きを隠さなかった。ロシア人がポーランドの労働者の家にやってきたとき，ロシア人はポーランドの労働者を「ブルジョア」だと思ったのだ。それどころか地域の共産党員の若干の者は，すぐにロシア人の低い水準に失望していた。「社会主義」社会における20年間は，ロシア人たちに資本主義国の誰よりも物質的所有にたいしていっそう渇望させていた。

一度，わたくしはガリツィア【現在のウクライナ南西部を中心とした地域】の州都リヴィウに出かけた。そこにはドイツに占領された地域からやってきた多くの難民が存在した。しかしその難民たちは数か月間，共産主義の支配下で生活した後では，もとの地域に戻ることを欲した。ドイツに占領された諸領域から届くニュースは悪くはなかった。ドイツ人のもとでの生活条件は我慢できる程度であると思われ，明らかにロシア人のもとでの生活条件よりも良かった。そのときはまだ，ドイツ人によるユダヤ人の迫害については，ユダヤ人はゲットーで暮らさねばならなかったということだけを除けば，何も聞かれなかった。さらにそのユダヤ人たちは働き，自分の生活費を稼ぐことが許され，そしてかなり安全であるように思われた。他方ロシア人のもとでは，以前から私有財産を持っている者たちはパスポートに「ブルジョア」というスタンプを押された。ユダヤ人は市町村の境界から外に100㎞以上は移動できなかった。家族の1人がポーランド軍の将校であったならば，疑いをかけられ，そして家族皆が密告された。わたくしがレムベルクに着いたとき，市役所前で長い人の列を目撃した。わたくしは，ドイツ軍に占領された地域に行きたい者は登録しなければならないという条例が出されたようだという話を聞いた。皮肉にも，何千人というユダヤ人がナチス占領地で暮らすことを願っていたのだ。2，3日後，登録した全員はロシアへと追放された。

1941年6月，朝早くに飛行機が数機，ボリスラフ上空を旋回していた。そのことが何か深刻な事態を意味しているとは誰も考えなかった。ロシア人は演習だと説明した。しかしたった数時間後には，それは戦争を意味すること，ドイツがロシアに攻撃をしたことが明らかになった。ボリスラフでは戦争行為はなかった。その地域は防衛されなかった。そしてパニックが起こった。何らかの仕方でロシアの占領とつながりを持ちえたすべての人々は，東方へ逃げようとした。十分には列車がなく，そしてもちろん最初にロシア人とその家族が避難し，そしてそれからもっとも目立っていた人々，なかでも共産党員であると知られている人々が続いた。

わたくしは重要な決断をしなければならなかった。討議グループのなかで，わたくしはキムという名前の若い共産党員と知り合った。わたくしたちは互いに親しくなり，そして町のなかでの大きなスキャンダルとなった。というのは、キムはかれの若い恋人＝将来の妻を「ベルリンカ」，つまりわたくしのために捨てたからであった。かれの親戚および友人たちはかれと縁を切り，そしてわたくしの両親は当然，既婚者であるわたくしがそのようなスキャンダルに巻き込まれたことを悲しんだ。キムはピウスツキ【Józef Piłsudski 1867-1935：ポーランド共和国の建国の父にして初代国家元首，国防相，首相。ポーランド軍創立者にして元帥。独裁的な政権で同国を盛り立てたことで知られる】体制の時代にしばらく刑務所に入れられていた。かれが共産党員であり，そして逃亡しなければならないことは知られていた。個人的理由からも，政治的理由からも，キムは，わたくしが一緒に行くだろうと確信していた。したがって，わたくしが一緒にロシアに行くのを拒んだことに，かれはショックを受けた。ロシアはわたくしの眼には巨大な刑務所のようであり，そしてトロツキー主義者としてのわたくしにとっては死を意味した。かれの願いや説明は何の役にもたたなかった。わたくしは留まることを選んだ。ドイツ人のもとで，わたくしはロシアにおけるよりもより大きな生き延びるチャンスを信じた。本当のことを言うと，わたくしは当時，ドイツ人が，ユダヤ人という理由だけで600万の人間を殺害する準備をしていたとは予想できなかった。さらに，わたくしは両親と妹と一緒にいっしょにいたかった。家族を支えるために。ロシア人は町から出る前に，多くの捕虜であったウクライナのナショナリストを殺害した。ロシア人はかれらを敵とみなした。ロシア人にはもはやそのナショナリストたちをロシアに連行する時間的余裕はなかったのだ。

ロシア人とロシアの協力者たちが消えて3日もしないうちに，最初のドイツ軍特命部隊がボリスラフに侵攻してきた。警察署の地下室のなかでウクライナ人の死体が発見されたとき，恐ろしい大量殺戮が始まった。ドイツ軍兵士たちに護送されて，ウクライナ人の農民たちはユダヤ人の家々にやってきて，若い男たちを警察署の地下室に連行し，そしてかれらを斧やハンマーで野蛮に殺害した。ウクライナ人の眼には，すべてのユダヤ人が共産主義者であり，そしてそれゆえにロシア人の行為に連帯責任があると見えたのだった。今や，ユダヤ人が代償を払わねばならないというのであった。歴史的原因とならんで，そのことはなぜウクライナ人が，ポーランドにおけるユダヤ人の排除においてナチスにとっての最良の支援者であったのかの理由であった。2日後，ドイツ人はポグロムをやめ，そしてユダヤ人は大胆にも再び街路に出た。いとこの一人はわたくしに，かの女の行方不明の夫を探すよう依頼してきた。わたくしたちはかの女の夫を数百人の手足が切断された死体のなかにみつけた。わたくしはその恐ろしい光景を決して忘れない。

その恐怖の出来事の後，ある種の「日常」が始まった。ユダヤ人はダビデの星が描かれた黄色の腕章を身に着けねばならなかった。わたくしたちは町のある決められた地域でしか居住を許されなかった。そのことは，ゲットーが設置されたことを意味する。食糧は乏しく，商店は閉じられねばならず，そして多くのユダヤ人は飢えた。農民たちは収穫物を以前のようには町に持ってこなくなった。というのは，かれらはお金など欲しくなかったからだ。品物だけが価値を有していた。それゆえ，わたくしたちはベッドのシーツ，着物，銀のフォーク・ナイフ・スプーン等を持ち，そして町近郊の農民たちのところまで何キロも歩いた。そしてそれらの品物をジャガイモ，穀物，そしてその他の食料品と交換した。

1941年11月に2回目のポグロムが起こった。今回はもっぱらドイツの警察官によって。数百人のユダヤ人が街路で捕らえられ，トラックに乗せられ，町の近くの森に輸送された。奇跡的に数人が生き延び，そしてショッキングな出来事を報告することができた。ユダヤ人は溝を掘らねばならず，それから射殺され，そしてその溝に埋められたのだ。

その後，2度目の「日常化局面」が始まった。ユダヤ協議会が形成された。ドイツのさまざまな部門との接触を維持するために。ユダヤ労働局も設置された。ユダヤ人に仕事を配分するために。その際，過酷な肉体労働のみが許可された。

その合間に，ボリスラフのロシアによって国営化されていたすべての産業がドイツ人によって引き継がれ，そしてドイツ人技師と行政職員が町にやってきた。

ある日，ユダヤ協議会の代表がわたくしの自宅を訪問した。かれはオーストリアの大学を卒業した弁護士であった。わたくしはすでに以前にかれと出会っていた。かれは，ボリスラフの警察が，わたくしをドイツにおける政治犯であると密告する葉書を受けとっていると話してくれた。幸運にも，その密告は警察署長のところには届いていない。ある警察職員が，その葉書を隠滅させるかわりに賄賂を希望した。かれはまた実際にユダヤ協議会から報奨を受けとった。ユダヤ協議会はボリスラフのすべてのユダヤ人から，それぞれできる範囲で，お金を集めた。町のドイツ人を買収できるように。ドイツ人が，ユダヤ人はロシアにいる国防軍のために装飾品や毛皮を提供しなければならないと決定したとき，ユダヤ人評議会はそれらの貴重品の収集とドイツ側への引き渡しを組織した。わたくしを密告しようとする動きがあると知ったとき，わたくしはパニックを起こした。というのは，わたくしがドイツにおいて反ファシズムの行動ゆえに刑務所にいたことがあることをドイツ人にばれたなら，いかに危険であるかを知っていたからである。

その問題の解決は思いがけなかった。わたくしは，ユダヤ労働局のためのタイピストとしての仕事を引き受けるよう要求されたのだ。ある日，ドイツ人の局長がわたくしのところに出向いてきた。石油産業の管理部門は近所に，しかもドロホビィチ【現在はウクライナ西部のリヴィウ州の都市。第一次世界大戦後ポーランドに編入される。1939年，ウクライナ・ソビエト社会主義共和国に併合されドロホブィチ州の中心都市となった。1940年にかけてポーランド人はカルパティア山脈を越えてソビエトからハンガリーに脱出した。1941年，ナチス・ドイツによって占領される。大きなユダヤ人社会があったために，ドロホブィチにはゲットーが作られた。ゲットーは1943年にナチスによって破壊されるまで存在した】におかれていた。ドイツ語用タイプライターと速記者が必要とされた。十分にはドイツ人市民が居住していなかったので，ユダヤ人でさえ雇用することが許された。ドイツ語を書いたり，話したりできる場合だが。わたくしは，ボリスラフを去りたいかどうかを一度も問われなかった。命令されたのだ。わたくしは仕事を引き受けるよう強いられた。ユダヤ人は旅行を禁じられていたので，一人のドイツ人警官が2時間の列車の旅をわたくしと共にしてくれた。両親は，わたくしがもう同居しないということに非常に悲しんだ。しかし他のやり方はなかった。それ以外では，わたくしは非常に気楽だった。そのようにして，わたくしの敵から，たとえそれが誰であろうと，身を隠せることを願った。ひょっとして，敵はわたくしを忘れるかもしれないと。

ドロホビィチにおいてもまた，わたくしはユダヤ人地区に住むことになった。わたくしはユダヤ人の中間階級の家庭に受け入れてもらった。ドロホビィチは州の首都であった。そこには若干の公園や映画館が存在した。ユダヤ人は，夕闇になりかけた以降はユダヤ人地区から離れることを禁じられた。

石油産業はドイツ人の手中にあった。最初は「ベスキデン石油会社」という名前で，後には「カルパタン石油会社」として。当然，指導的地位はドイツ人が占めたが，ポーランド人およびその他の人々とは分離されておよそ15ないし20人のユダヤ人もまた存在した。

（この項未完）

（2019年8月27日受理）